

◎ 美術館情報

最新の情報は、各施設の公式ホームページなどでご確認ください。

1. 瀬戸蔵ミュージアム【愛知・瀬戸】(<https://www.city.seto.aichi.jp/docs/2011/03/15/00146/>)

1月20日(土)～4月14日(日)

企画展：瀬戸の鉄絵皿

江戸時代幕藩体制下の瀬戸は18の村々から構成されており、窯業生産が行われたのは瀬戸村・赤津村・下品野村・上水野村・下半田川村の5か村でした。江戸時代後期になると瀬戸窯の歴史の中でも大きな画期をなす、磁器生産がはじまります。磁器生産の開始にあたっては、それ以前より窯業技術の高まりも見られ、瀬戸窯の装飾技術のほぼすべてがこの時代に出揃いました。陶器生産においては鉄絵具による軽妙でのびのびとした筆運びの石皿や行燈皿、馬の目皿などが生産された一方、皿の縁に文様を丁寧に書き込んだ高麗手、南画系絵師による山水画やその影響を受けたものなど、雅趣あふれる作風も幅広く共存しました。こうした江戸時代後期の瀬戸窯における鉄絵具を用いた製品群については、後の昭和時代の著述のなかでも

見ることができます。民俗学者の柳田國男は『火の昔』で生活の道具としての行燈皿を紹介し、民藝運動の創始者である柳宗悦は『工藝の道』で、その絵付けに健全な自然の恵みの美を見出しました。本展ではこれら鉄絵製品の展観に併せて、顔料としての鬼板や水打粘土などの含鉄土石、元素としての鉄そのものについても改めて見ていきます。



2. 根津美術館【東京・港区】(<https://www.nezu-muse.or.jp/exhibition/next.html>)

2月10日(土)～3月26日(火)

企画展：魅惑の朝鮮陶磁 展示室1

特別企画：謎解き 奥高麗茶碗 展示室2

展示室1は、主に館藏品で朝鮮陶磁の歴史を概観し、その魅力を見つめ直すものです。魅惑的な朝鮮陶磁の世界に、あなたもひたってみませんか。

展示室2 奥高麗茶碗は、九州肥前地方、現在の佐賀県唐津市周辺で焼かれた、朝鮮陶磁の高麗茶碗を写した茶碗です。江戸時代後期から茶の湯の世界で賞玩され、戦後の古唐津ブームの中で鑑賞の世界でも高く評価されてきました。しかし、その名前や窯の場所、何が「奥高麗」なのか、など、多くの謎が残されています。展示室1の朝鮮陶磁、なかでも「奥高麗」の手本となった高麗茶碗の展示に続き、ここでは奥高麗茶碗の成立を、その特徴から「唐津焼の茶の湯の茶碗」として提示することで解明を試みました。謎を解くことができたのか、ご覧いただければ幸いです。



3. 出光美術館 門司【福岡・北九州】(<http://s-idemitsu-mm.or.jp/exhibition/present/>)

1月12日(金)～3月24日(日)

企画展：陶磁の東西交流

珍しい造形や異国情緒溢れるデザイン。陶磁器はバラエティーに富み、人々の生活を豊かにしてきました。それらは地域の文化や風土に根ざすだけでなく、アジア、ヨーロッパと人々が交流を重ね、互いに美しい装飾や技術に惹かれあうことで、魅力的な文化も創造してきました。日本や中国の陶磁、イスラーム陶器、マイセンやセーブルなど、東西の交流を通して生み出された陶磁器を紹介します。

